

京都府北部の土馬・陶馬

～資料館寄託品の紹介と資料集成～

文化財保護課 桐井理揮

1. はじめに

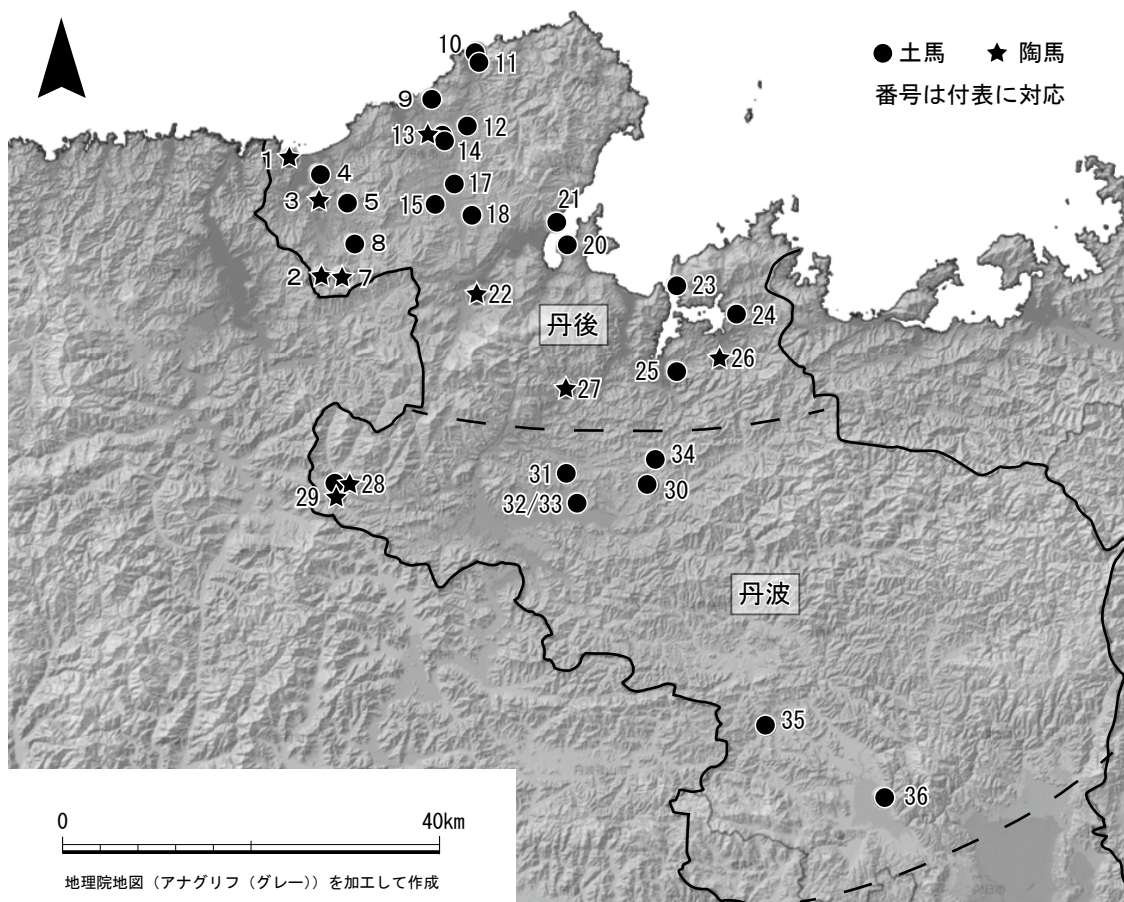
令和4年度の特別展「祈りのカタチー丹後に生きた人々の願いー」では、通史的に「祭祀」が取り上げられるなかで、土馬と陶馬が展覧された。土馬は江戸時代には好事家によるスケッチが残されているなど、古くから注目されてきた遺物であり、水霊、祈雨、峠神、墓前など多様な祭祀に使用されたことが想定されている。

資料館に寄託されている土馬・陶馬は後述の3点があるが、これまで写真で紹介されるのみで図化されていなかった。本論ではこれらの資料紹介を行うとともに、京都府北部における資料を集成し、その特質について見通しを述べたい。なお、本論では土師質の小型馬形を「土馬」、須恵質の小型馬形を「陶馬」と呼び分ける。

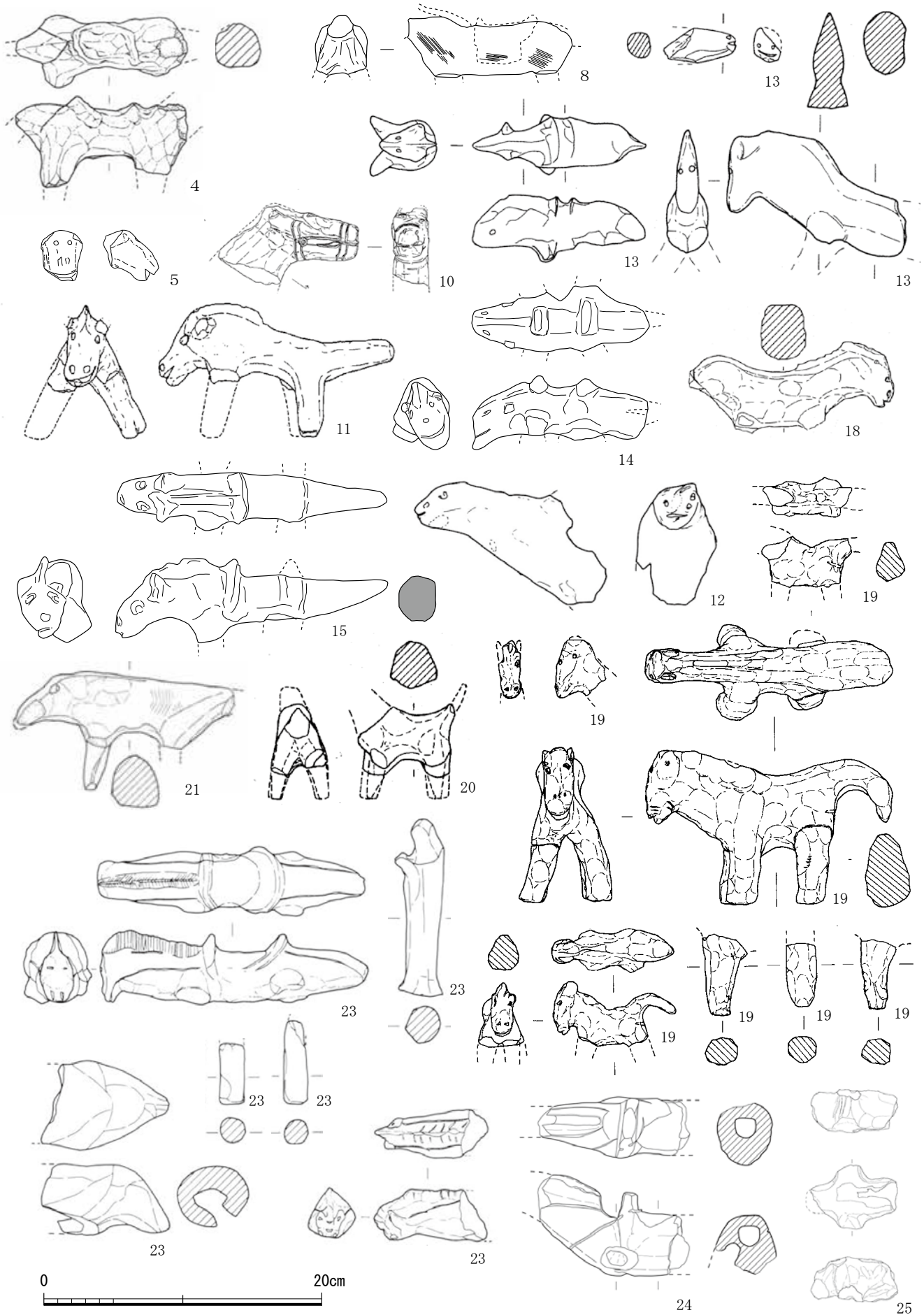
2. 資料の紹介

① **途中ヶ丘遺跡採集・土馬(第2図15)** 体部に「1948年峰山町新治オオシバラ」と墨書きされた土馬である。中実で、四肢は欠損する。破断面には接合の痕跡等は認められない。円筒形の粘土を成形して製作したとみられ、耳と鞍は別の粘土が貼り付けられている。目と鼻は竹管、口はへら描きで表現される。左耳の下には薄いへら描きの線が認められ、手綱表現の可能性はある。

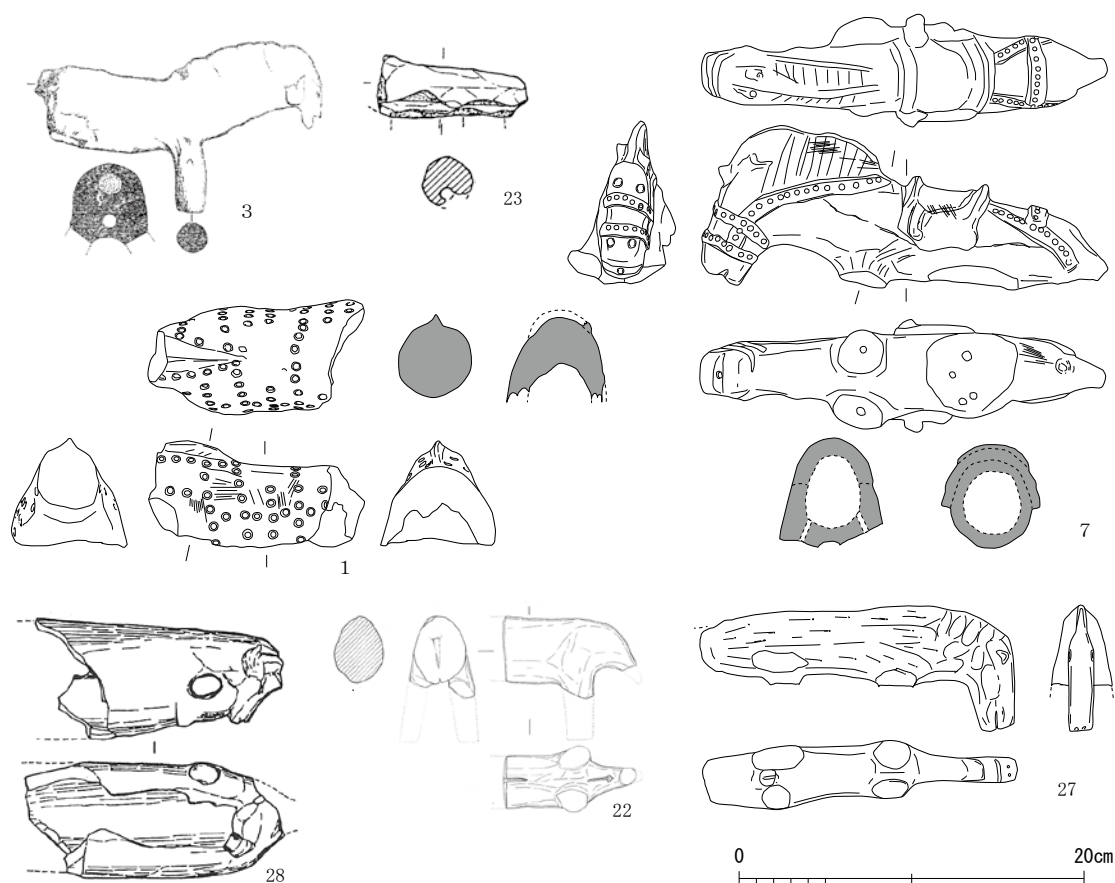
② **大向採集・陶馬(第3図1)** 大向は小天橋の砂嘴の先端付近で、現在は埋蔵文化財包蔵地としては周知されてない。採集の由来は不明である。体部は断面U字形を呈し、頸部以上は中実となる。頸部の上面にはたてがみが粘土をつまみ出すことによって表現される。背上部には粘土の剥離痕跡があり、本来は鞍が接合されていたのだろう。外面には規則的に竹管文が施されており、三繋に伴う紐が表現されているほか、障泥とみられる方形の区画と鐙のような表現もあり、抽象的だ



第1図 京都府北部の土馬・陶馬の分布



第2図 丹後出土の土馬



第3図 丹後・丹波出土の陶馬

が飾馬を表現したものである。

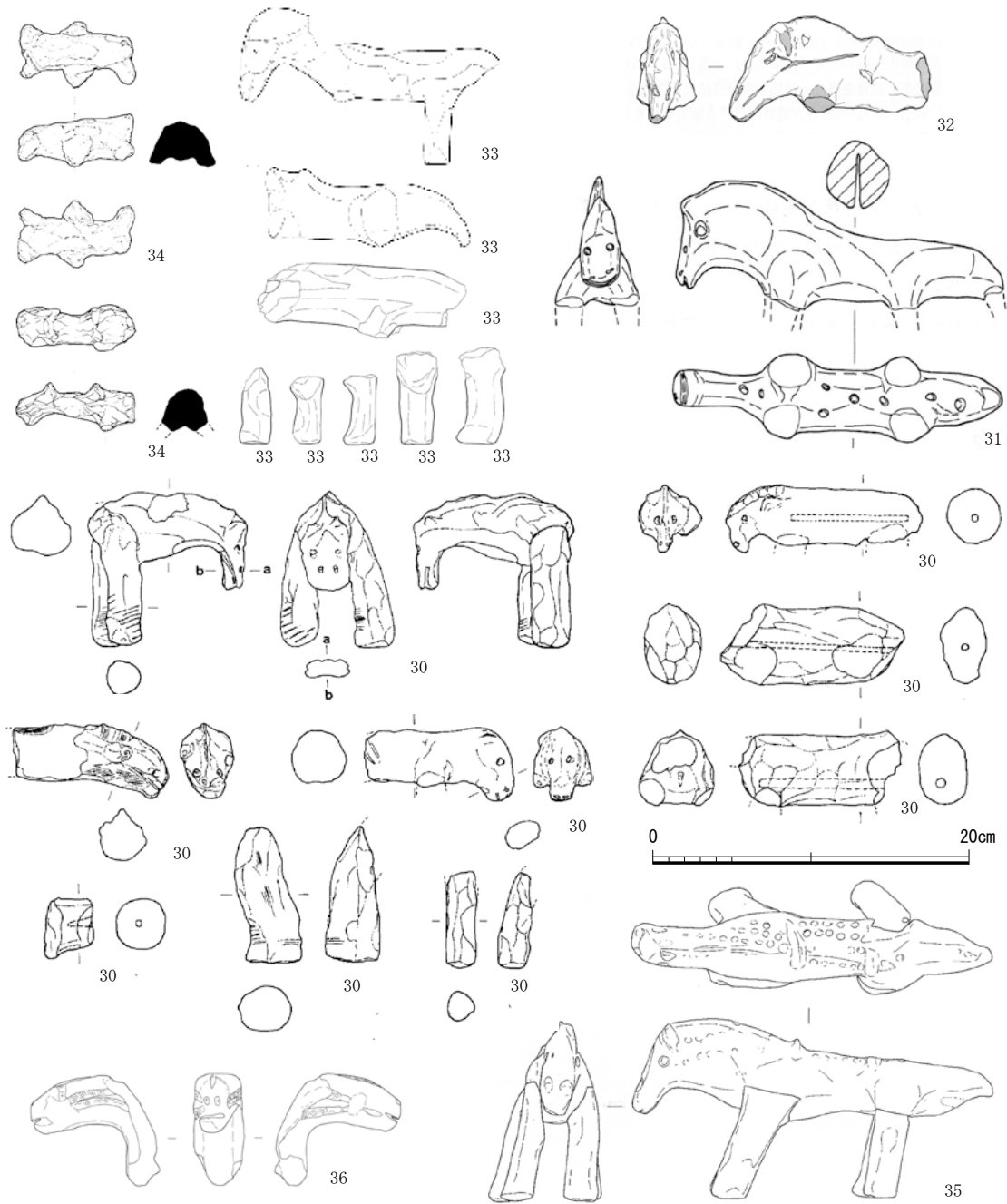
③ **円城寺跡採集・陶馬(第3図7)** 久美浜町円城寺跡で採取されたとされる陶馬である。四肢は欠損する。剥離面には、前脚は左右とも1か所、後脚は合わせて4か所の刺突があり、木芯接合技法が用いられている。後脚の刺突のうち、2か所は深さ1cm程度だが、残りの4か所は内部の空洞まで達している。それとは別で尻部と口の内部にも刺突があり、いずれも内部の空洞部まで達する。体部中位には横方向の粘土接合痕があり、体部上半と下半を貼り付けることにより成形したと考えられることから、内面は棒状の空洞があると想定される。

顔面、耳、たてがみ、尾など各パーツだけでなく、頸部の肉感も写実的で、馬具も忠実に表現されている。面繫は轡の表現はないが、紐が細い粘土で表現され、竹管により装飾が施される。辻金具が使用されるべき箇所は竹管による刺突が深くなっている。鞍は前輪・後輪のほか、上部に板状の粘土が貼り付けられており、居木の可能性があ

る。側面には、板状の障泥が表現される。前輪に接するように棒状の粘土で鐙が貼り付けられる。鐙はナデにより先端が凹んでおり、壺鐙とみられる。尻繫は3本の紐から成り、同様に竹管による刺突があり、やはり辻金具部分のみ刺突が深い。尻部分は1周せず、側面までで途切れている。

3. 近畿北部における土馬の様相

① **研究史** 考古学的な知見から土馬を分類し、変遷を論じたのは大場磐雄であり、飾馬→裸馬という基本的な変遷を捉え、馬具表現の有無などから「飾馬・鞍馬・裸馬・櫃原型」に分類した(大場1966)。この4類型はその後の研究の骨子となっており、小笠原好彦の研究によって都城型(櫃原型)土馬の変遷観は確立された(小笠原1975)。一方、地方での土馬の変遷もしくは製作、使用の実態に関しては未解明の部分が多い。土馬は青森県から鹿児島県まで全国的に出土する遺物だが、それぞれの地域で製作技術や流通については基本的な統一が図られているかどうかは不明であり、地



第4図 丹波出土の土馬

域ごとに事例を蓄積していくことが求められる。

② **丹後における研究と現状** 丹後では、古くから採集資料としてその存在が知られていたが、初めて具体的に言及されたのは海士採取の陶馬である。(前田1965、第3図3)。1974年の府内の集成では(平良1974)、丹後出土の3点が掲載された。1985年に丹後郷土資料館で行われた特別展『祈りの遺跡—丹後の古代信仰—』における集成では12遺跡にまで増加している(丹後郷土資料館1985)。『京丹後市史』での集成では、京丹後市内に限定されているが、16遺跡28点が紹介され

ている(橋本2010)。

その後増加した事例を加え、今回36遺跡での出土を確認した。以下、要素ごとに京都府北部における土馬・陶馬の様相を概観する。

分布と数量 丹後では27遺跡で出土している。佐野谷川、川上谷川流域ではやや分布が集中しているが、それ以外で際立った粗密はなく、丹後全体でまんべんなく出土が認められる。浦入遺跡、遠所遺跡以外では単独での出土である。丹波では9遺跡での出土を確認している。分布には明確に粗密があり、北西部の福知山市夜久野町で3点、

綾部市域で14点が出土しているのに対し、南丹市、亀岡市では各1点のみであり、旧夜久野町を除く福知山市と京丹波町、旧京北町では出土事例がない。亀岡市域、福知山市域など発掘調査が豊富に蓄積されている地域でも出土例が少ないことから、この分布の粗密はある程度実態を反映しているとみてよいだろう。

なお、隣接する但馬では1999年の集成で9点であり(大平1999)、近畿北部では丹後での出土数が最も多い。やや目を広げると、山城では都城型を除くと17遺跡、摂津では37遺跡(桐井2015)で、丹後での出土数は、遺跡総数・調査件数に対して高率といえるだろう。

時期 採集資料が多く、帰属時期がわかるものは少ないが、帰属時期がわかるものを中心に概観する。

古墳時代に遡るものとして野崎3号墳周溝のものがあるが、これは土馬というよりもミニチュア土製品とした方が正しいのかもしれない。なお、同様の事例は各地で確認されており、土製馬形を使用した祭祀の初現的なあり方と考えられる。古墳に直接伴うかは不明だが、以久田野古墳群では複数点が出土している。いずれも大型で馬装表現が写実的であり、古墳時代まで遡る可能性もある。幾坂遺跡では写実的な裸馬がまとまって出土しており、7世紀代とされている。さらに検討を要するが、近畿中部で想定されているような、「飾馬→裸馬」「大型→小型」という一元的な変遷ではなく、出現当初から両者が併存するのが地方における在り方なのだろう。

帰属時期がわかるものが最も多いのは8世紀代で、製作・使用のピークは奈良時代にある。9世紀代に下る可能性があるのは女布遺跡など少量で、9世紀代で消滅すると考えられる。

出土遺構 丹後では製塩遺跡である浦入遺跡や、製鉄遺跡である遠所遺跡・ニゴレ遺跡で複数点が出土しており、生産遺跡における祭祀の一端を示す事例として興味深い。包含層資料ながらいずれも8世紀代とみられる。破片も含め10点が報告されている南稲葉遺跡は、8世紀前半の土器を伴う。近世に山家・上林方面に抜ける峠として

利用された横峠の入口に位置しており、峠神祭祀の具体的事例として注目される。丹波国分寺跡では整地層から鉄鉢等を伴って出土している。また、表採資料からあえて言及するならば、海沿いの遺跡からの出土がやや目立つことは、研究史で指摘されてきた通り、水霊祭祀の一端を示しているのであろうか。

一瞥しただけでも多様で、整理できる状況ではないが、これは京都府北部に限ったことではなく、多様な使用実態を示しているのだろう。

焼成方法 これまで旧久美浜町域では陶馬が多いことがこれまで指摘されてきたが、第1図で示したように、これは丹後一円に共通する特徴とみたらうが適切である。丹波での陶馬の出土が旧夜久野町域に限られることも、北部への偏在を示している。

舞鶴市と福知山市夜久野町では須恵器窯から出土した事例が知られており、地域内での生産・流通を想定してもよいだろう。地頭遺跡とフカサ遺跡の陶馬は、体部の作りや、性器を表現する点など共通項が多く、同一の生産地を想定してもよいかもしれない。

なお、摂津では50点以上の出土があるが、陶馬は3点しか確認できていない。河内・和泉でも比率は同程度とみられ(市村2007)、山城では菟道遺跡の1点のみである。丹後の在り方は畿内と比較すると明らかに高率である一方、鳥取・島根県域や岡山県域では60%程度(内田ほか2005、松尾2012)と、近畿以西の在り方と比較すると突出した比率ではない。当然ではあるが、丹後の状況は畿外でのあり方の一端を示すものである。

これは土馬・陶馬の受容と展開を考える上では重要な論点であり、別稿にて再論することとした。

4. まとめ

以上、雑駁ながら京都府北部の状況についてまとめた。今回は向後の基礎データとして未図化のものを含め、集成作業に主眼をおいたものである。個別の課題は他地域の事例とも比較しつつ検討していきたい。

本稿をなすにあたり、次の方々に教示を受けた。記して感謝申し上げる。杉原和雄、名村威彦、松尾史子、松崎健太、鷲田紀子

参考文献

市村慎太郎2007「第2節 土馬について～府内集成結果の概要～」『はざまみやま遺跡』2、大阪府文化財センター内田律夫ほか2005「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌』22、島根考古学会
大場磐雄1966「上代馬形遺物再考」『國學院雑誌』第67巻第1号 國學院大學文学部
大平 茂ほか1999『田井野遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第154冊、兵庫県教育委員会
大平 茂2008「小型土製馬形年代考」『研究紀要』第1号 兵庫県立考古博物館
小笠原好彦1975「土馬考」『物質文化』25 物質文化研究会
丹後郷土資料館1985『祈りの遺跡—丹後の古代信仰—』
桐井理揮2015「摂津出土土馬の検討」『待兼山遺跡』V、

大阪大学埋蔵文化財調査室
佐藤晃一1991「加悦町フカサ遺跡出土の陶馬」『太邇波考古』6、両丹考古学研究会
平良泰久1974「京都府下「馬」出土地一覽」『京都考古』第1号 京都考古刊行会
橋本勝行2010「(2)土馬」『京丹後市の考古資料』京丹後市史資料編、京丹後市史編さん委員会
前田豊邦1965「丹後国海士出土の陶馬」『古代学研究』第41号、古代学研究会
前田豊邦2006「古墳時代」『夜久野町史』第2巻資料編
松尾洋平2012「岡山県における古代神仏習合の一様相」『古事 天理大学考古学・民俗学研究室紀要』16、天理大学文学部
三好博喜2001「綾部市以久田野17号墳出土遺物の実像」『北近畿の考古学』両丹考古学会・但馬考古学研究会
他にも多くの文献を参考としたが、紙幅の関係で省略せざるを得なかった。特に研究史については諸論で詳述されているほか筆者もまとめたことがある。合わせて参照いただきたい。

図面/ 地図番号	遺跡			時期	部位・数量	器質	備考	文献
	遺跡	遺構	関連施設					
1	大向	表探	臨海	—	胴部1	陶	丹後郷土資料館保管。本報告。	丹資1985
2	柿ノ本	表探		—	胴部1	陶	写真のみ。	丹資1985
3	海士	表探		—	脚部欠1	陶		前田1965
4	日光寺	包含層		—	胴部1	土		府セG37
5	女布	溝	式内社 女貴神社	8c後～9c前	頭部1	土		府教委2019
6	(川上谷か)	表探		—	胴部1	土	川上小学校保管。写真のみ。	橋本2010
7	円城寺	表探	寺院	—	頭～体部1	陶	丹後郷土資料館保管。本報告。	丹資1985
8	小桑	表探	寺院?	—	胴部1	土	昭和50年表探。杉原氏実測図提供。	丹資1985
9	長底	表探		—	胴部1、脚部1	土	写真のみ。	丹資1985
10	竹野	表探	式内社 竹野神社	—	頭部1	土		府セG107
11	宮	表探	式内社 竹野神社	—	脚部欠1	土		府セG107
12	奈良谷	包含層		—	頭部のみ	土		府セ概76
13	遠所	流路	製鉄	8c中	頭～体部3、頭部1	陶1、土3		府セ報21
14	ニゴレ	包含層	製鉄	8cか	頭～体部1	土	1994年調査。本報告で実測。	—
15	途中ヶ丘	表探	—	—	頭～体部1	土	丹後郷土資料館保管。本報告。	丹資1985
16	伝・丸山	表探		—	脚部欠1	陶	写真のみ。	橋本2010
17	カンジョガキ	—		—	—	土	2022年調査。名村威彦氏教示。	—
18	七尾	表土中	古墳	—	頭～体部1	土		峰山町教委7集
19	幾坂	丘陵斜面		7c中～後	頭部1、頭～体部1、体部1、ほぼ完形1、脚3	土		大宮町教委16集
20	獅子	表探		—	脚部欠1	土		宮津市教委17集
21	難波野	包含層	臨海	8c後～9c前	頭～胴体1	土		府セG121
22	フカサ	表探		—	頭～体部1	陶	オス	佐藤1991
23	浦入	包含層/ 竪穴建物	製塩	8c	頭～体部1、頭部1、体部1、脚部5	土		府セ報31
24	田畔	包含層		7c後	体部1	土		舞鶴市50集
25	倉谷	溝		9c後	体部1	土		舞鶴市教委23集
26	行永小丸山窯	灰原か	窯跡	飛鳥か	脚部1	陶	松崎健太氏教示。	—
27	地頭	表探	—	—	頭～体部1	陶	メス。杉原氏実測図提供。	丹資1985
28	荒堀	—	窯跡周辺	—	頭部1、体部1	陶	1点は詳細不明。	前田2006
29	高内鎌谷	灰原	窯跡	—	不明1	陶	詳細不明。	前田2006
30	南稲葉	包含層/ 竪穴建物	横峠入口付近	8c中	頭～体部4、胴部3、脚部2	土		府セG91
31	長	土坑		7c後	頭～体部1	土		綾部市教委21集
32	以久田野17号墳	表探	古墳下層か	—	頭～体部1	土		三好2001
33	以久田野26号墳	墳裾	古墳	6c末～7c中	体部3、脚部5	土		綾部市教委38集
34	野崎4号墳	周溝	古墳		頭～体部2	土		府セ報17
35	町田	溝		7c中～後	完形1、不明1	土		園部町教委10集
36	丹波国分寺跡	包含層	寺院	8c後	頭部1	土		亀岡市教委46集

※丹資1985＝丹後郷土資料館1985『祈りの遺跡』/府セG＝『京都府遺跡調査概報』第〇冊/府セ報＝『京都府遺跡調査報告書』/各自治体の報告書は巻数のみ表示。/その他の参考文献は巻末に記載。